

さく語りたまへといふ。エホバサアルにひ賜けるハ麗イサアルのうちの一の事をなさんて

をさくものハ皆其耳ふたつから鳴ん 其目にはわかれ嘗てエリの家かつひて言して事を知より終までて
とてさくエリにさすべし。われかつてエリに其惡事のため永くその家をさかかんとせせりその子
の証ふべきをなすを去りて之をささめさせられたるなり。是故おわきエリの内へ誓ひてエリの家の惡ハ儼

然あるハ其禮物をもて承くわがふ人能く進んたり。サムエル朝までいねてエホバの家の戸を開きしつ

其異象をエリおそめすて事を告ぐる。エリサムエラをよびてひひけるハわが子サムエルも告げたるハわ
れごとくあり。エリひひけるハ何事を告ぐつげたまひしや。諸ふ我わかくすなからさ致も告げたる

はしとてをなすもかくすときハ神汝にかくなくし又かさねてかくなくしたまへ。サムエル其事をこそ告
どく。さめして彼に隱すてさかきエリひひけるハ是。エホバなり其よしを見たまふて事をなしたまへ

とサムエル。さだちぬ。エホバみだれどもおほいせし。このてをなして。一も地おちどらめたまふ。
よりもエホバにいたるまで。エホバサムエルの人みなサムエルの預言者さだまれるを忘れり。

エホバたたまひ。びとてわらせられたまふ。エホバに於てサムエルの言によりてサムエルにののれをま

めしたまふなり。サムエルの言をまねく。エホバににおよぶ。
サムエル人。エリサムエルの邊に陣をどり。エリサムエルの
エホバに陣をどり。エリサムエル人。エリサムエル人。エリサムエル人。エリサムエル人。エリサムエル人。

サムエルの女にやぶる。エリサムエル人。エリサムエル人。エリサムエル人。エリサムエル人。エリサムエル人。
の長老白ける。エホバ何故に。今日我儕を。エリサムエルの女にやぶりたまひしや。エホバの契約の櫃を

一五五〇三耶六〇
一五五〇三耶五三
一五五〇三耶四七
一五五〇三耶四一
一五五〇三耶三五
一五五〇三耶二九

五五〇二耶三五
六五〇二耶二七
六五〇二耶二一
六五〇二耶一五
六五〇二耶九

五五〇一耶三〇
五五〇一耶二四
五五〇一耶一八
五五〇一耶一二

五五〇一耶七
五五〇一耶一
五五〇一耶五

五五〇一耶零

五五〇一耶零

五五〇一耶零

五五〇一耶零

五五〇一耶零

五五〇一耶零

五五〇一耶零

口より此にたづ。來らん其櫃われらのうちに來らば我らを敵の手よりすくひいだすことあらんと。か

くて民人を。エホバに坐して。ケルベムの上に坐したまふ。萬軍のエホバの契約の櫃を其處よりたづさへ

たらむ時。エリサムエルの二人の子。エホバに。エホバの契約の。櫃を其處にあり。エホバの契約の

櫃陣營に。いたりし。エホバ。エホバに。よび。いひ。けり。エホバ。エホバに。よび。いひ。けり。エホバ。エホバに。よび。いひ。けり。

を開て。ひひける。ハ。エホバ。エホバに。よび。いひ。けり。エホバ。エホバに。よび。いひ。けり。エホバ。エホバに。よび。いひ。けり。

たれるを知る。エリサムエル人。おそれて。ひひける。ハ。神陣營に。いたる。又ひひける。ハ。嗚呼。われら。神ある。か。今。に。

いたるまで。斯ること。なかりき。わが。我儕。神なる。か。誰か。われら。を。是。の。強き。神の。手。より。すくひ。いだ。さ。ん。

や。此。等の。神の。災を。以て。エホバ。人。を。曠野。に。撃。つ。者。あり。ハ。エリサムエル。人。強くなり。豪傑。の。ごと。く。

爲。せ。ハ。エホバ。人。が。つて。汝ら。に。事。し。て。ど。く。汝。ら。これ。お。事。ふ。る。な。か。れ。豪傑。の。ごと。く。爲。して。戦。へ。よ。か。く。て。ハ。

リサムエル。人。が。お。れ。ハ。エホバ。人。が。お。れ。ハ。エホバ。人。が。お。れ。ハ。エホバ。人。が。お。れ。ハ。エホバ。人。が。お。れ。

作。れ。し。者。三。萬。人。な。り。き。又。神の。櫃。ハ。エホバ。人。が。お。れ。ハ。エホバ。人。が。お。れ。ハ。エホバ。人。が。お。れ。

一。軍。中。より。走。り。去。り。し。其。衣。を。裂。き。土。を。か。む。り。て。ノ。に。いた。る。其。い。た。れ。る。時。ハ。エホバ。人。が。お。れ。

望。居。た。り。其。心。に。神の。櫃。の。こと。を。思。ひ。煩。ら。ひ。た。れ。ば。な。り。其。人。の。い。たり。人。々。お。告。げ。れ。ば。邑。を。去。り。て。さ。け。

び。た。り。エリサムエル。人。の。呼。號。の。聲。を。さ。く。て。ひひける。ハ。是。唱。嘯。の。聲。ハ。何。なる。や。と。其。人。い。て。エリサムエル。人。に。つ。く。

時に。エリサムエル。人。九。十。八。歳。に。し。て。其。目。か。た。ま。り。て。見。る。こと。わ。た。さ。ず。其。人。エリサムエル。人。を。よ。び。て。さ。り。

もの。我。今。日。軍。中。より。逃。れ。たり。エリサムエル。人。を。よ。び。て。いひける。ハ。吾。子。よ。事。い。かん。何。人。答。へ。て。いひける。ハ。エホバ。人。を。よ。び。

エホバ。人。の。前。心。逃。げ。日。民。の。中。に。大。なる。戰。死。あり。また。汝。の。二人。の子。ホバ。ニ。と。せ。テ。ハ。エホバ。人。の。呼。號。の。聲。を。

撒母耳前書 第四章 自十一至四章三節 四百六十七

彼なり若し去かせず我儕をうちし彼の手おらずしてこの儼然なりしをなせるべし 人々のい
 お斯くし二つの乳牛をとりて之を車かつなきその轡を室おとちてめ 一ホバの轡および金の鼠と其塵物
 の像をおさめたる轡を車お載す 牝牛直おあゆみてベラメシの路をゆき鳴つて大隘をすくみゆきて右
 左におさむらさべリシテ人の君主ベラメシの境まで其うしろをかまたたけいゆけり 時ホベラメシ人谷に
 麥を刈り居たりしを自をわけて其轡をみ之を見るをよるべり 車ベラメシ人ヨシエアの田にいりて
 其處にどまざる此ホバ大なる石あり人々車の木を劈り其牝牛を燃祭としてエホバにささげたり レビの人
 ニホバの轡とこれどもある轡の金の製作物をさめたる者をとりおろし之を其大石のうへにおく云か
 してベラメシ人此日エホバお燃祭をうなる犠牲をささげたり べリシテ人の五人の君主之れを見て同
 じ日にニクロッに加えり ざてべリシテ人お過祭としてエホバになせし金の塵物のこれおちり即ち
 シロンのためお一ガサのため一アラクロンのためお一ガサのためお一ニクロンのため一おちりき
 た金の鼠ハ城邑を領里をいはす凡て五人の君主お属するべリシテ人の鼠の數にまたたけひて遣れりエホバ
 の轡をおらせし大石今日おいたるまでベラメシ人ヨシエアの田にあり べラメシ人の人々エホバの轡
 をうかきひしおよりエホバこれらうちたまふ即ち民の中七十八人をうてりエホバ民をうちて大にこれ
 ろしたまひしかば民おささげべり べラメシ人いひけるい誰かこの聖き神なるエホバのまへに立つて
 之をえんエホバ我らをはれて何人のどろにのぼりゆきたまふべきや かくて使者をキリアヤリム
 の人に遣はしていひけるいべリシテ人エホバの轡をかへしたれば汝らくだりて之を汝らの所に携入のば
 るべし

母去五三

母去五三

母去六〇四

母去五〇二一 母去五〇三

母去六〇九 母去三〇

母去六〇四 母去六〇五

母去五〇三

母去五〇四

母去五〇五

母去五〇六

母去五〇七

母去五〇八

母去五〇九

母去五〇一〇

母去五〇一一

母去五〇一二

母去五〇一三

母去五〇一四

母去五〇一五

母去五〇一六

母去五〇一七

母去五〇一八

母去五〇一九

母去五〇二〇

母去五〇二一

母去五〇二二

母去五〇二三

母去五〇二四

母去五〇二五

母去五〇二六

母去五〇二七

母去五〇二八

母去五〇二九

母去五〇三〇

母去五〇三一

母去五〇三二

母去五〇三三

母去五〇三四

母去五〇三五

母去五〇三六

母去五〇三七

母去五〇三八

母去五〇三九

母去五〇四〇

母去五〇四一

母去五〇四二

母去五〇四三

母去五〇四四

母去五〇四五

母去五〇四六

母去五〇四七

母去五〇四八

キリアヤリムの人來りエホバのたてを據のばりてこれを出のうへあるアヒナダアの家におち
 きたり其子エラザルを聖てエホバの櫃をさもらしむ 其櫃キリアヤリムにどまざるほど久しくして
 二十年をへたりイスラエルの全家エホバを去たひて數なり 時ホサムエルイスラエルの全家お告ていひ
 ける汝らも同じ心をしてエホバにかり異なる神をアモロテを汝らの中より棄て汝らの心をエホバお
 定めおののみ事へおバエホバ汝らおべリシテ人の手より救ひいださん こそにおいてイスラエルの人々
 ンバアルとアラプロテをすてエホバにのみ事ふ サムエルいひけるいイスラエル人をこそとくニエホバ
 におつめよ我汝らのためおエホバにいらん かれらエホバに集まり水を汲て之をエホバのまへお注ぎ
 其日飢食して彼處おひひけるい我儕エホバに罪ををかしたりとサムエルニエホバお飛てイスラエルの人を
 轉く べリシテ人イスラエルの人々のエホバに集れるを聞ておべリシテ人の諸君主イスラエルおせめ
 のばれりイスラエル人これをおべりシテ人をおろたり イスラエルの人々サムエルに云けるい我ら
 のために我らの神エホバに祈ることをおゆるなるを祈れ然らばエホバ我らをおべリシテ人の手より救ひだ
 しためにエホバにいりければエホバこれにたへたなまふ サムエル燃祭をささげ居し時べリシテ人イス
 ラエル人と戦はんとて近づきぬは日エホバ大なる雷をくだしべリシテ人をうちて之を亂し馳せり
 シテ人イスラエルのまへに敗れたり イスラエル人ニエホバをいいでべリシテ人をおひ之をうちてベラ
 カルの下にいたる サムエル一の石をとりてエホバとせの間に おきエホバは聖て我らをお助けたまへり
 といひて其名をエベニヤラ(助けの石)と呼ぶ べリシテ人攻伏りれて再びイスラエルの境にいらずサム
 エル

母去五〇四九
 母去五〇五〇
 母去五〇五一
 母去五〇五二
 母去五〇五三
 母去五〇五四
 母去五〇五五
 母去五〇五六
 母去五〇五七
 母去五〇五八
 母去五〇五九
 母去五〇六〇
 母去五〇六一
 母去五〇六二
 母去五〇六三
 母去五〇六四
 母去五〇六五
 母去五〇六六
 母去五〇六七
 母去五〇六八
 母去五〇六九
 母去五〇七〇
 母去五〇七一
 母去五〇七二
 母去五〇七三
 母去五〇七四
 母去五〇七五
 母去五〇七六
 母去五〇七七
 母去五〇七八
 母去五〇七九
 母去五〇八〇
 母去五〇八一
 母去五〇八二
 母去五〇八三
 母去五〇八四
 母去五〇八五
 母去五〇八六
 母去五〇八七
 母去五〇八八
 母去五〇八九
 母去五〇九〇
 母去五〇九一
 母去五〇九二
 母去五〇九三
 母去五〇九四
 母去五〇九五
 母去五〇九六
 母去五〇九七
 母去五〇九八
 母去五〇九九
 母去五〇一〇〇

エルの一生のおひだエホバの手ペリシテ人をふせけりペリシテ人のイスラエルより取たる邑々ハエホバよりガラまでイスラエルにかへりぬまた其周圍の地ハイスラエル人これペリシテ人の手よりとりかへせりまたイスラエル人エホバより好むをばすべりサムエル一生のおひだイスラエルをさばきまたラマにかへれり此處に其家あり此にてイスラエルをさばき又此ハエホバに壇をきつけり

サムエル年老て其子をイスラエルの士師となす兄の名をヨエルといひ弟の名をアヒヤといひサムエルバにありて士師たり其子父の道をあゆませりて利にむかひ賄賂をとりて審判を曲ぐ是に於いてイスラエルの長老みあひまつりてラマにゆきサムエルの請に至りてこれにひひけるハ爾も汝ハ老い汝の子ハ汝の道をあゆませざればわれらに王をたててわれらを轄かしめ他の國々のごとくあらじしよとの我らに王をたてて我らに王をたてしめよとていふを開てサムエルよるてば亦而してサムエルニホハひのりしかバエホバサムエルにひひたまひけるハ民のすべて汝にいふよとのことを聴け其ハ汝を棄るにあらず我を棄て我をして其王となせんとめんとするありかれらハエホバより救ひいだせし日より今日にいたるまで我をすてて他の神につかへて種々の所行をなせしめて汝にもまた然らず然れどもいふ其言をきけ但し深くいさめて其治むべき王の常例をなめすべしサムエル王を求むる民にエホバのこのことを告ぐていひけるハ汝等をして王の常例ハ斯のごとし汝らの男子をして己れのために之をたてし車の御者となし騎兵となしまた其車の前驅とあざんまた之をおのれの爲に千夫長五十夫長とあしまた其地をたがへし其作物を別らめまた武器と車器とを造らめぬまた汝

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

らの女子をとりて製香者となし厨婢となし又汝らの田賦と葡萄園と橄欖園の最も豊きところを取て其臣僕にあて汝らの穀物と汝らの葡萄の半分をとりて其官吏と臣僕にあてまた汝らの僕婢および汝らの最も善き年と汝らの驢馬を取ておのれのために作かしめ又汝らの羊の十分一をとり又汝ら其僕となさん其日において汝等已のために擲せし王のこのことによりて呼ばらんされどヨホバ其日に汝らに聽たまはざると然に民サムエルの言に忠たふふことをせすしてひひけるハ否われらに王なかるべからず我らも他の國々の如くあり我らに王われらを轄せられを奉て我らの戦にたくかたんサムエルのことを聞く聞て之をエホバの耳に告ぐエホバサムエルにひひたまひけるハかれらのことを聴きかれらのためハ王をたてよサムエルイスラエルの人々にひひけるハ汝らおのれの其邑おへるべし

一 按にエホバの言て各ける力の太なるものありキエハアヒヤの子アヒヤの子ナリキエにサムエルの名を羅ンの子ゼロンの子ベコラの子アヒヤの子アヒヤニヤミヨンの子ナリキエにサムエルの名も高しサムエルの父キエの驢馬失ぬキエ其子サムエルにひひけるハ一ハの僕をともなひ起ちてゆく驢馬を尋ねよサムエラエラエルの山地を通り過ぎキエの山地を通りすべりサムエルも見わたらずエラエルの地を通りすべりれども居らずニヤミヨンの地を這はりすべりれども見わたらずかれらツツの地にいたれる時サムエルもなへる僕をひひけるハいひて還らん恐らんわが父驢馬の事を捨て我僕のことを思ひ煩ぜん僕これひひけるハ此邑ハ神の人あり奪き人にして其言ふとてハ皆必ず成る我らかしておひたらん

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

ハ其日汝らに聽たまはざると然に民サムエルの言に忠たふふことをせすしてひひけるハ否われらに王なかるべからず我らも他の國々の如くあり我らに王われらを轄せられを奉て我らの戦にたくかたんサムエルのことを聞く聞て之をエホバの耳に告ぐエホバサムエルにひひたまひけるハかれらのことを聴きかれらのためハ王をたてよサムエルイスラエルの人々にひひけるハ汝らおのれの其邑おへるべし

一 按にエホバの言て各ける力の太なるものありキエハアヒヤの子アヒヤの子ナリキエにサムエルの名を羅ンの子ゼロンの子ベコラの子アヒヤの子アヒヤニヤミヨンの子ナリキエにサムエルの名も高しサムエルの父キエの驢馬失ぬキエ其子サムエルにひひけるハ一ハの僕をともなひ起ちてゆく驢馬を尋ねよサムエラエラエルの山地を通り過ぎキエの山地を通りすべりサムエルも見わたらずエラエルの地を通りすべりれども居らずニヤミヨンの地を這はりすべりれども見わたらずかれらツツの地にいたれる時サムエルもなへる僕をひひけるハいひて還らん恐らんわが父驢馬の事を捨て我僕のことを思ひ煩ぜん僕これひひけるハ此邑ハ神の人あり奪き人にして其言ふとてハ皆必ず成る我らかしておひたらん

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

五 聖書五十六卷六章十一節

かれ我らがゆくべき路をわれらもえめすことあらん サウル僕もいひける我らもいひかへ何を其人に
 かくら九か器のパン既お醫て神の人おあくるべき禮物あらす何かあるや 僕またサウルおてい
 ひけるの禮よ我の手お銀一シケルの四分の一あり我てこれを神の人おわたへてわれらも路をえめさしめん
 と昔しイスラエルおあひて人神おとほんとてゆくときり先見者おゆかんとしへり其の今の預言
 者お昔し之先見者よよせられたればなり サウル僕にいひける善くいへりいざゆかんとて神の人のをる
 邑おおもひけり 加れら邑に在る坂をのぼれる時童女數人の水くみにいづるおあひにひけるの先見
 者此水をもや 嘗ていひける入るを視よ汝のまへにを急ぎゆけ今日民崇耶にて祭をなすやより彼け
 公邑にきたれり 汝ら邑に在る時かれの崇耶にのぼりて食を就くまへに直ちにかれにわたん其の御まづ
 祭品を祝して去かるのち招かれたる者食ふべきに困りかれが来るまで民食之ざるあり故ち汝らのばれ
 今かれおあんと 加れら邑にのぼりて邑のなかに在るとき視よサウル崇耶にのぼらんとておれらに
 むかひて出きたりぬ 五ホバサウルのきたる一日まへおサウルの耳につげていひたまひける 明日
 いまごろ我ニヤミンの地より一箇の人を汝につかはさん汝かれお膏を注ぎてわが民イスラエルの長と
 なせかれわが民をベリシテ人の手より救ひいださんわが民のさげび我に達せしおより我これをかへりみ
 るなり サウルサウルを見るときニホバこれいひたまひける 禱よ且が爾おつげし此人なり是人
 わが民ををさむべし サウル門の中おてサウルおちかづきいひける 先見者の家入いづくにおわや 請
 ふ我おつげよ サウルサウルおていひける 我ハすなはち先見者なり 爾わがまへにゆきて崇耶
 にのぼれ爾ら今日我どももあ食す可し明日我をさらしめ汝の心にあることを悪く汝おえめさん 三

一七六
 王申年三月十四日
 二八〇六

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

言をえめさん
 サウルすなをさ膏の瓶をとりてサウルに頭を沃して曰ける 何バ汝をたてし其座
 業の長とせしなまへにあらずや 汝今日我をば浴れて去りゆく時ニヤミンの境にセルサにあるラケル
 の墓のかたえらわて二人の人にあふべしかれら汝をいえん汝がたづねにゆきし驢馬を見あたりぬ汝の父
 驢馬のこをすて汝らのこをとおもひわづらひわが子のこをいかにすべきやとていへり 其處より
 汝向すくみてヌボルの橡の樹れどころにいたらんに彼處おてペラルにければり神おまうてんとする三人の
 言をえめさん
 サウルにいひけるは僕お命じて我價の先にゆかしめよ僕先にゆくまかして汝價くどもまれ我汝に神の
 さんどサウルすあはらるべきおほなるサウルとサウルどもに外にいで 邑の極處おくだれるときサウル
 のきたる 加れら早くおく即ちサウルも囁く屋背の上なるサウルをよびていひける 起よわれ汝をのへ
 此日サウルどももあ食せり 崇耶をくだりて邑おわいりし時サウルサウルどもも屋背の上おても
 汝のまへにおきて食へ其のれ其をまねきし時よりこれを汝の爲めたくとておきたればかりかくてサウ
 ルの肩に屬る者をとりおけて之をサウルのまへに置く サウルいひける 禱よ是は入るべきなる物あり
 に坐せしむ サウル隨人にいひける 入わが汝おわねたして汝の請もあけしといひて分をもちきたれ 隨人
 我にかたるや サウルサウルと其僕をみちびきて堂おひり招かれたる二十八ばかりの者の中の最も上
 支派なるニヤミンの人のにしてわが族ハニヤミンの支派の諸の族の最も小き者に非やんを斯とを
 るや即ち汝と汝の父の家のものからずや サウルこれたてていひける 我ハイスラエルの支派の最も小き
 日に入ら失たたる汝の驢馬に既に見あたりたれば之をおもふんか 抑もイスラエルの總ての實の誰の者お

一七六
 王申年三月十四日
 二八〇六

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一創五三二
 二創五三二
 三創五三二
 四創五三二
 五創五三二
 六創五三二
 七創五三二
 八創五三二
 九創五三二
 十創五三二
 十一創五三二
 十二創五三二
 十三創五三二
 十四創五三二
 十五創五三二
 十六創五三二
 十七創五三二
 十八創五三二
 十九創五三二
 二十創五三二

一 撒母耳前書 章十一

一 撒母耳前書 章十一 節一

二 撒母耳前書 章十一 節二

三 撒母耳前書 章十一 節三

四 撒母耳前書 章十一 節四

五 撒母耳前書 章十一 節五

六 撒母耳前書 章十一 節六

七 撒母耳前書 章十一 節七

八 撒母耳前書 章十一 節八

九 撒母耳前書 章十一 節九

十 撒母耳前書 章十一 節十

十一 撒母耳前書 章十一 節十一

十二 撒母耳前書 章十一 節十二

十三 撒母耳前書 章十一 節十三

十四 撒母耳前書 章十一 節十四

十五 撒母耳前書 章十一 節十五

十六 撒母耳前書 章十一 節十六

十七 撒母耳前書 章十一 節十七

十八 撒母耳前書 章十一 節十八

十九 撒母耳前書 章十一 節十九

二十 撒母耳前書 章十一 節二十

二十一 撒母耳前書 章十一 節二十一

二十二 撒母耳前書 章十一 節二十二

二十三 撒母耳前書 章十一 節二十三

二十四 撒母耳前書 章十一 節二十四

二十五 撒母耳前書 章十一 節二十五

二十六 撒母耳前書 章十一 節二十六

二十七 撒母耳前書 章十一 節二十七

二十八 撒母耳前書 章十一 節二十八

二十九 撒母耳前書 章十一 節二十九

三十 撒母耳前書 章十一 節三十

凡て汝らを虐める國人の手より救ひいだせり 然るも汝らあつたれば患難と難苦れより救ひいだしたる
 汝らの神を棄て且否われらに王をたてよといへり是故にいま汝等の支派と部々たつたててエホバのま
 へに出よ サムエルイスラエルの諸の支派を呼よせし時ニヤミツの支派にわたたりぬ またニヤミ
 ツの支派を其族のかずあまたがひて呼よせしときニヤミツの族にわたたりキの子サムエルにわたれり人
 人かれを尋ねしごとく見出されば またエホバのこゝろに來るや否やを問しおエホバ答たまはく視よ
 彼の行李のあひだにかくると人々はせめて彼を其處よりつれきたれり彼の民の中にたつ肩より以上
 民の何の人も高かりき サムエル民にひひけるは汝らエホバの擧めたまひし人を見るか民のうちお
 是人の如き者なし民みなよきりひひけるは願くは王のいよちなほりて 時おサムエル王國の典章を民か
 ぞめて文を書きてまのし之をエホバの主人お藏めたりとてかしてサムエル民をこぞりて其家にかへら
 ひ サウルもまたギベアの家かへるに神お心を感ぜられたる勇士等これどもにゆけり 然れども邪
 なる人々ひ人いかにて我らをお救えんとといひて之を預り之に禮物をやくりさりてよかサウルの呪の
 とくせり

サムエルイスラエルの諸の支派を呼よせし時ニヤミツの支派にわたたりぬ またニヤミツの族にわた
 たりキの子サムエルにわたれり人々かれを尋ねしごとく見出されば またエホバのこゝろに來るや否やを
 問しおエホバ答たまはく視よ彼の行李のあひだにかくると人々はせめて彼を其處よりつれきたれり彼の
 民の中にたつ肩より以上民の何の人も高かりき サムエル民にひひけるは汝らエホバの擧めたまひし人
 を見るか民のうちお是人の如き者なし民みなよきりひひけるは願くは王のいよちなほりて 時おサム
 エル王國の典章を民かぞめて文を書きてまのし之をエホバの主人お藏めたりとてかしてサムエル民をこ
 ぞりて其家にかへらひ サウルもまたギベアの家かへるに神お心を感ぜられたる勇士等これどもにゆけ
 り 然れども邪なる人々ひ人いかにて我らをお救えんとといひて之を預り之に禮物をやくりさりてよかサ
 ウルの呪のとくせり

撒母耳前書 第十章

一 撒母耳前書 第十章 節一

二 撒母耳前書 第十章 節二

三 撒母耳前書 第十章 節三

四 撒母耳前書 第十章 節四

五 撒母耳前書 第十章 節五

六 撒母耳前書 第十章 節六

七 撒母耳前書 第十章 節七

八 撒母耳前書 第十章 節八

九 撒母耳前書 第十章 節九

十 撒母耳前書 第十章 節十

十一 撒母耳前書 第十章 節十一

十二 撒母耳前書 第十章 節十二

十三 撒母耳前書 第十章 節十三

十四 撒母耳前書 第十章 節十四

十五 撒母耳前書 第十章 節十五

十六 撒母耳前書 第十章 節十六

十七 撒母耳前書 第十章 節十七

十八 撒母耳前書 第十章 節十八

十九 撒母耳前書 第十章 節十九

二十 撒母耳前書 第十章 節二十

二十一 撒母耳前書 第十章 節二十一

二十二 撒母耳前書 第十章 節二十二

二十三 撒母耳前書 第十章 節二十三

二十四 撒母耳前書 第十章 節二十四

二十五 撒母耳前書 第十章 節二十五

二十六 撒母耳前書 第十章 節二十六

二十七 撒母耳前書 第十章 節二十七

二十八 撒母耳前書 第十章 節二十八

二十九 撒母耳前書 第十章 節二十九

三十 撒母耳前書 第十章 節三十

者汝にわは八人三頭の山羊煮を携へ一人三圓のパンを汝わわたへん汝之を其手よりうくべし 其の後汝神のギベアにいたらん
 ら汝に妥否を以て二圓のパンを汝わわたへん汝之を其手よりうくべし 其の後汝神のギベアにいたらん
 其處おベリシラ人の代官あり汝彼處にゆきて邑にいらき一群の預言者の意と笛と篳篥を前お執らせ
 て預言を以て一其の時神のみたま汝の分みて汝かれらにもに預言し變りて新
 しき人とならん 是らの御汝の身にありて汝の手にあはせし神故とともにもにまさせ
 なり 汝我にさきたちてギルガルにくだるべし我汝の許にくだりて燔祭を供へ脚躰祭を献げんわが汝の
 もとに至り汝の爲すべきことを示すまで汝七日のあひだ待つべし サウル昔をかへしてサムエルを離れ
 し時神に新しきがわわわたへたまふかして此をるし皆其日におこれり ふたり彼處おゆきてギベアお
 いたれるときひとも一群の預言者これにおふかして神の靈サムエルにのぞみてサムエルにのぞかざらざら
 預言せり 素よりサムエルを誦る人々サムエルを誦る見えて互ひにひひけるはキツの子サム
 エル今何事おふやサムエルも預言者の中にありて 其處の一人ひて答へて彼等の笑ひ離すやとていふは是
 故おサムエルも預言者の中にあるやとていふり謔とぞれり サウル預言を終て崇所にいたるに サウルの叔
 父サムエルにひひけるは何處おゆきてやサムエルにひひけるは驢馬を尋ねに出し何處おもをらざる
 を見てサムエルの請にいたれり サウルの叔父にひひけるはサムエル汝に何をいひしを請ふ我おつげよ
 サウル叔父にひひけるは明かに驢馬の見わたりしを告げたりと然れどもサムエルが言る國王の事とこれ
 につげさりき サムエル民をミズバにてエホバのまへに集め サムエルの子孫にひひけるはサムエル
 ルの神おホバ期くひいたたまふ我サムエルをみみびきてエツリトより出し汝らサムエルをエツリト人の手および